

## ベトナムにおける「二十四孝」の研究

本研究は中国で生まれた「二十四孝」説話をとりあげ、それがベトナムにどのように流布し、また受容され変容したのかを文化交渉の視点にもとづき明らかにするとともに、ベトナム人の「孝」思想の特徴を考察したものである。

序論「ベトナムにおける儒教の研究状況―「孝」思想を中心に」では *Thư mục Nho giáo Việt Nam* (『越南儒教書目』) にもとづき、ベトナムにおける儒教の評論・研究状況につき、「孝」思想を中心に整理した。ベトナムにおける「儒教」、「孝」についての評論・研究は多様多彩であり、各時代によっても違う。筆者の調査によれば、阮朝以前に「孝」に特化した評論はなく、阮朝以降にそれが現われてくるが、数は少ない。しかし、この時期の重要な特色として、『孝経』や二十四孝説話が「ベトナム化」したことを挙げるができる。「孝」思想および「二十四孝」説話は古代から現在までベトナムの社会に重要な位置を占めているが、現在まで、ベトナムでは文献学上からベトナムにおける「二十四孝」説話をとりあげた先行研究がないことも指摘した。

第一部では「「二十四孝」とベトナム」と題してベトナムにおける「二十四孝」説話の基本的状況を論じた。

第一部第一章「中国の「二十四孝」説話とその系統」では中国の「二十四孝」説話の作者と「二十四孝」説話の三つの系統、すなわち『全相二十四孝詩選』、『日記故事』、『孝行録』の三系統を考察した。そして、孝子の人物および記載法により、ベトナムにおける「二十四孝」は『日記故事』系に属するものであることを明らかにした。また、中国の「二十四孝」の著作である郭居敬、郭居業についても論じた。

第一部第二章「ベトナムにおける「二十四孝」」では、後黎朝から現在までのベトナムにおける「孝」思想、さらに阮朝から現在に至る「二十四孝」説話の位置を考察しつつ、ベトナムにおける「二十四孝」説話の流布状況を明らかにした。たとえば、黎朝では「不孝」の場合は「十悪」という罪に問われることが法律化されていた。阮朝の明命帝は官吏任用の際に孝行者を選び、「孝子」に「孝行可風」、「孝順可風」等の扁額を恩賞している。教育面においては、フランス植民地時代、ベトナムの小学校の教科書の中に「孝道」教育の項目が多い。さらに、現在のベトナム社会主義共和国の刑事法には親の体を傷つける罪、親を侮辱する罪、親を誣告する罪の条例がある。市・区の委員会は親孝行の人物を宣揚し、賞を授けるイベントをしばしば行い、新聞、テレビなどの報道で宣伝している。このような歴史的伝統の中で、李文馥の「二十四孝演歌」をはじめ、綿寓皇子の「補正二十四孝傳衍義詩」、鄧輝燾の『四十八孝詩畫全集』、黄高啓・張甘榴の『西南仁道孝演歌』などの二十四孝関連著作 29 点が次々に誕生したのは当然の流れといえる。「二十四孝」説話は科挙試験には使用されなかったが、かつてベトナムで漢字を教える講師は学生教育の際、これを不可欠な書物とし、特に北部の儒者の家では教育用書物として用いられていた。

第二部では「「二十四孝」のベトナムの社会に対する影響」と題して「二十四孝」説話がベトナム社会にどのような影響を与えたのかを関連文献を中心に考察した。

第二部第一章「李文馥と「二十四孝演歌」について」では、李文馥の経歴、および彼が著した「二十四孝演歌」を文献学的に考察した。「二十四孝演歌」は李文馥が「二十四孝」説話を漢文によって引用したあと、その意味を字喃の「双七六八体」で解説したもので、明命十六年（1835）旧暦10月に著わされた。李文馥は子孫に家訓として残す目的でこれを書いたが、その後、全国的に流行したことからわかるように、同書はわかり易い、啓蒙性の高いものであるといえよう。本章後半では24首の詩をすべてとり上げ、語釈と日本語訳をつけておいた。また『孝順約語』、『勸孝書』、『陽節演義』、『詩文並雑紙』の四文献はいずれも李文馥の「二十四孝演歌」を収録しているので、それらとの文字の異同も記しておいた。ベトナムにおける「二十四孝」説話関係の文献としては、李文馥の作品が圧倒的に多く読まれていた。その意味で李文馥は「二十四孝」を「ベトナム化」した先駆者であり、「二十四孝演歌」はベトナムで初めて「二十四孝」のすべてを解説した文献として特筆される。

第二部第二章「詠二十四孝詩」と中越文化交渉」では「詠二十四孝詩」の作者5人と同書の内容につき考察した。「詠二十四孝詩」は李文馥、陳秀穎、杜俊大が中国広東に使臣として派遣されたとき、譚鏡湖、梁釗という中国人の友人と唱和した七言絶句の詠詩であり、明命十六年（1835）旧暦11月に書かれた。本章では5人による詠詩123首をとり上げ論じるとともに、他の『孝順約語』、『勸孝書』、『陽節演義』、『驩州風土話』との文字の異同も記した。考察の結果、ベトナム・中国の両国の知識人が「孝」に関して豊かな文学的才能を発揮し、文化交渉に寄与していたことが確認された。本書は民衆に広く流布することはなかったが、当時のベトナムの官吏、知識人階層に影響を与えたものであって、ベトナムにおける中国文化、とりわけ「二十四孝」説話の受容を物語る貴重な文献である。

第二部第三章「綿窩皇子と「補正二十四孝傳衍義詞」について」では「補正二十四孝傳衍義詞」をとりあげ、作者である綿窩皇子の人生や著作、その「勸孝」の精神が王室の子弟に「孝」の教育に対してどのような役割を果たしたのかを明らかにした。ベトナムにおける「二十四孝」説話関連文献29点のうち、「補正二十四孝傳衍義詞」のみは阮朝の王室メンバーの作品である。「補正二十四孝傳衍義詞」は「二十四孝」説話を漢文によって引用したあと、その意味を字喃の「双七六八体」で解説している。成泰十一年（1899）以降、和盛郡王となった綿窩皇子が定め、子の洪煜が訂正、刊行した。本章では24首の字喃の詩をとり上げるとともに、日本語訳をつけた。本書は李文馥の「二十四孝演歌」と違い、現代ベトナム語に訳されていないようであり、民衆には流布しなかったが皇室内で子孫たちへの教訓書として広く読まれたようである。なお、本書では阮朝に普及した避諱の方式が用いられていることも指摘した。

第二部第四章「李文馥系の「二十四孝」と『日記故事』系の各文献の比較」では、『日記故事』系の代表的な「二十四孝」文献として万暦三十九年版、寛文九年版、「二十四孝原編」、『超子固二十四孝書画合璧』、および「二十四孝原本」を紹介した。そして、『掇拾雜記』所収の李文馥「二十四孝演歌」の漢文部分（本文）および *Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』、Nam Định 印刷所、1908年）に収められている図版をこれら『日記故事』系の各文献と比較した。これは、李文馥系の「二十四孝演歌」のうち、図版を載せているのが *Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）だからである。比較の結果、ベトナムにおける「二十四孝」の変遷を再確認できた。そして、『日記故事』系の「二十四孝原本」が李文馥系の「二十四孝演歌」漢文部分（本文）および *Nhị thập tứ hiếu*（『二十四孝』）（図版）の底本になったことを明らかにした。

第三部では「ベトナムでの「二十四孝」の変遷」と題して「二十四孝」説話を基礎として展開したベトナム独自の孝行説話について論じた。

第三部第一章「「二十四孝」説話からベトナム独自の『西南仁道孝演歌』へ」では黄高啓・張甘榴によって編纂された『西南仁道孝演歌』をとり上げた。そこに記されている西洋・日本およびベトナム 28 人の孝子の説話（散文）につき、日本語訳をつけ、「二十四孝」の変遷を明らかにし、ベトナム人の「孝」思想を論じた。この文献には古典的な漢字・字喃文献の特徴とともに、20 世紀初頭の文献の特徴をも看取できる。すなわち、ベトナムの民族性の自覚とともに、ヨーロッパやアジアに広く目を向けようとする 20 世紀初頭の潮流を反映したものになっている。なかでも、外国の孝子説話を入れたことは、近代に至って西洋の文化と交流し、グローバルな傾向を強めたベトナム社会を背景とするものである。また思想面から見ると、本書に記された「孝」は「養親」、「奉親」、「敬親」という「孝」の狭い意味から、国家、民族の権利を優先させ、愛国心や祖先崇拜、祖先祭礼といった「孝」の広い意味を包括するものとなっている。すなわち、本書においてベトナムの「孝」思想は家族道徳から社会的道徳へと転換されつつあるといえよう。

第三部第二章『四十八孝詩畫全集』と中国の「二十四孝原編」、「二十四孝別集」の比較』では『四十八孝詩畫全集』（以下、『全集』と略称）をとりあげた。『全集』は、鄧輝燿によって中国の朱文公「二十四孝原編」、高月槎「二十四孝別集」を参考にして編纂され、嗣徳丁卯年（1867）に出版された漢文の刊本である。『全集』所収の「二十四孝原編」、「二十四孝別集」の原文と図版をとりあげつつ、これらの原本になったとされる「二十四孝原編」、「二十四孝別集」と比較した。本書にはベトナムの避諱があり、中国とは別の七言絶句を挿入しているため、『全集』は「二十四孝原編」、「二十四孝別集」に従い再編したものであるが、そのまま写したものではないことがわかる。また、図版もベトナム風に描き改められている。『全集』は独自のベトナム的特色を持つ文献であるといえる。また『全集』では、阮朝に普及した避諱の三つの方式を用いていることも指摘した。

本研究では、ベトナムに伝わる「二十四孝」説話について、そのテキストを網羅的に調査、紹介し、その作者、成立年代につき考察するとともに、中国や日本伝存のテキストと比較し、文献の伝来と変遷、文献学上・思想上の特色などについて解明した。多くの文献が字喃による解説をともなっている点も大きな特色であり、阮朝末期になると国語字（現代ベトナム語）による解説も現われる。ここではそれらを可能な限り現代語訳して提示しておいた。

これらの文献はおおむね「二十四孝」説話の三系統のうち『日記故事』系に属するものであり、「二十四孝原編」、「二十四孝原本」はベトナムにおける「二十四孝」の底本となった。一方、「二十四孝別集」は『四十八孝詩畫全集』の底本として用いられた。このほか、李文馥、綿寓皇子、黄高啓、張甘榴、鄧輝燿らによる「二十四孝」各文献がベトナムの近世・近代の文学史に重要な位置を占める字喃文学としても貴重であることも再確認できた。

漢文・字喃・現代ベトナム語の三種類の文字を用いて記されているこれらの多様多彩な「二十四孝」文献の存在は、ベトナムにおいて「孝」の思想が王族から庶民レベルまで広く普及し、ベトナム文化の重要な伝統を形成した証拠とあってよいであろう。これまでベトナムにおける「二十四孝」がほとんど研究されてこなかったこと、また現代のベトナム社会において個人主義がもてはやされ、「孝」や「孝悌」への意識が変化する状況にあることを考えれば、本研究はベトナムの重要な文化・思想の一端を究明するとともに、また将来への展望を示すという意味をもちうるのではないかと思われる。